

連文における叙述内容の反復

長 田 久 男

一 はじめに

ある事象を詳細に表現するのに、一つの文では、表現しきれない場合がある。そういう場合は、文を二つ以上排列して対応するのが普通である。ある事象を表現するために、文が二つ以上排列されているとき、それを「連文」と呼ぶことにする。

連文には、「叙述内容の反復」という現象がある。連文における叙述内容の反復について概説する。

二 同一語句による具体的な反復

〔例1〕 ノンちゃんは、小学校の二年生です。ノンちゃんはおかあさんが大すぎです。

後の文の冒頭の「ノンちゃん」は、前の文の冒頭の「ノンちゃん」をそのまま反復したものである。

〔例2〕 うちのおばあさんは、「長生きしたかいがあった。」とよろこんでいます。うちのおばあさんは、明治二〇年生まれです。この例も、後の文の冒頭の「うちのおばあさん」は、前の文の冒

連文における叙述内容の反復

頭の「うちのおばあさん」をそのまま反復したものである。

〔例3〕 むかし中国に、ひとりの王様がありました。王様は、世界一りつばなごてんに住んでいました。

前の文の文中の「王様」という語が後の文の冒頭にそのまま反復されている。

〔例4〕 お寺の門から少しはなれたところにバスの乗り場があります。坂道からおりてきたふたりは、乗り場のベンチにこしをかけました。

前の文中の「乗り場」という語が、後の文の文中にそのまま反復されている。

〔例5〕 どうにかなることでいろいろ努力していくことには希望が持てる。希望が持てることは、その人を幸福にする。

これは、いわゆる尻取りである。即ち、前の文の文末の「希望が持てる」という句が後の文の冒頭にそのまま反復されている。

〔例6〕 はるおさんの手紙がポストにはいつていました。ほかの手紙やはがきもはいつていました。

前の文の文末の「はいつていました。」という句（不完全な句）が

後の文の文末にそのまま反復されている。

同一語句による具体的な反復とは、以上のような現象を指す。

このような例の場合、言語主体は、いわゆる叙述内容の繋がりを意識する。叙述内容の繋がりが意識は、同一語句が反復されていることと無関係ではない。

例1・2・3・4のように、同一語が反復されているということは、その語によつて表現されている概念が反復されることである。また、例5のように同一句が反復されるということは、その句によつて表現されている判断内容が反復されることである。概念あるいは判断内容の反復を本稿では一括して叙述内容の反復と呼ぶ。叙述内容の反復とは、先に表現した概念あるいは判断内容を、後の文に持ち込むことである。したがって、叙述内容の反復を叙述内容の持ち込みと言いかえてもよい。

叙述内容の反復もしくは持ち込みという考えは、表現という立場からの見方である。この見方とは別に、表現されたものを構造として見る立場がある。即ち、反復される前(持ち込まれる前)のものと、反復された(持ち込まれた)ものとの両者の関係について考えようとする見方である。それによると、反復される前のものと、反復したものは同一であるから、両者は重なり合っているということになる。したがって、叙述内容の反復もしくは持ち込みを「叙述内容の重なり合い」として見ることになる。この叙述内容の重なり合いを、言語主体は、叙述内容の繋がりと認識するのである。

ところで、その概念あるいは判断内容の重なり合いという心的事実を、再び言語の形の上に求めるならば、語句の重なり合いとして規定することができる。語句の重なり合いを仮に次のように図示する。

○ ノンちゃん は 小学校の三年生です。

○ ノンちゃん は おかあさんが大きいです。

○ むかし中国に、ひとりの 王様 がありました。

○ 王様 は、世界一りつばなごてんに住

んでいました。

○ お寺の門から少しはなれたところに バスの 乗り場 があります。

○ 坂道からおりてきたふたりは、 乗り場 のベンチに

こしをかけました。

○ どうにかなることでいろいろ努力していく

ことには 希望が持てる。

希望が持てる ことはその人を幸福にする。

さて、同一語句を直接反復するのを、叙述内容の反復の第一類型とする。

三 コ・ソ・ア系統の指示語による

抽象的な反復

〔例7〕 無言の行というの、落ち着いた心を作るために、ひと ことも口をきかないでいることです。これをしているあいだは、どんな場合にも、決して、ものを言つてはならないのです。

後の文の冒頭は「これ」という、コ系統の指示語になつてゐる。「これ」の内容は、前の文の「落ちついた心を作るために、ひとことも口をきかないでゐること、即ち、無言の行」である。この語をそのまま具体的に反復するかわりに、コ系統の指示語の「これ」を使つたものである。したがつて、例7は、

○無言の行というのは、落ち着いた心を作るために、ひとことも口をきかないでゐることです。落ちついた心を作るために、ひとことも口をきかないでゐること、即ち、無言の行をしてゐるあいだは、どんな場合にも、決してものを言つてはならないのです。

と意味は等しくなる。次の例8・9なども同様の例である。

〔例8〕 なかには、外見上は全く同種類の雑草と思われぬのに、かれ方がちがうのがあります。これはふしぎだといふので、山崎博士はその原因をつきとめてみようと思ひました。

後の文の冒頭は、「これ」というコ系統の指示語である。「これ」の内容は、「外見上は全く同種類の雑草と思われぬのに、かれ方がちがうのがあるということ」である。したがつて、例8は、

○なかには外見上は全く同種類の雑草と思われぬのに、かれ方がちがうのがあります。外見上は全く同種類の雑草と思われぬのに、かれ方がちがうのがあるということは、ふしぎだといふので、山崎博士はその原因をつきとめてみようと思ひました。と意味は等しくなる。

〔例9〕 葉にさわると、急に葉がつぼんでしまふ、めずらしい草を知つていますか。それはおじぎそうです。

後の文の冒頭は、「それ」というソ系統の指示語である。「それ」の内容は、「葉にさわると、急に葉がつぼんでしまふ、めずらしい草」である。したがつて、例9は、

○葉にさわると、急に葉がつぼんでしまふ、めずらしい草を知つていますか。葉にさわると、急に葉がつぼんでしまふ、めずらしい草はおじぎそうです。

と意味は等しくなる。

次の例で後の文の冒頭の「この心がけ」は、指示語「この」と、先行文中の……線の「心がけ」という語の反復とで構成されてゐる。

〔例10〕 自分が話をするときにも、聞く人の身になつて話す心がけがたいせつです。この心がけが欠けてゐると、説明の不じゅうぶんな、「舌たらず」の話になつたり、くどすぎる話になつたりします。

「この心がけ」は、「聞く人の身になつて話す心がけ」となるから、「この」の反復内容は、「聞く人の身になつて話す」である。したがつて、例10は、

○自分が話をするときにも、聞く人の身になつて話す心がけがたいせつです。聞く人の身になつて話す心がけが欠けてゐると、説明の不じゅうぶんな、「舌たらず」の話になつたり、くどすぎる話になつたりします。

と等しくなる。

次の例11・12・13・14・15・16も同様の例である。

(注) 反復内容は、それぞれ、(一)内にそれを示した。

〔例11〕 その葉には、細かい毛のようなたげがいつぱいあります。そのとげにちよつとさわると葉がつぼみます。

(そのとげ↓葉にある細かい毛のようなたげ)

〔例12〕 川口の近くは、あつすなのそうになるわけです。このすなが、あら波にうちあげられ、北西からふきつける強い風にふき飛ばされて、海岸に広く高く積みあげられ、砂丘を作りあげたのです。

(このすな↓あつすなになっている川口の近くのすな)

〔例13〕 まるで、はるかかなたから、すなの波がおしよせてくるようなもようが、目のとどろかざり広がついてるのです。このもようを、風もんといいます。

(このもよう↓はるかかなたからすなの波がおしよせてくるようなもよう)

〔例14〕 手紙や小包など、ゆうびん物を出す時切手をはる。その切手は、ふつう、たて二十五ミリ、横二十ミリほどの、小さな紙きれで、一まい一まい見たのでは、あまり目だたないものである。

(その切手↓手紙や小包などゆうびん物を出す時はる切手)

〔例15〕 それは関門鉄道トンネルと関門国道トンネルである。これらのトンネルは、わが国が外国にさがかけて、本州の下関と、

九州の門司との間に造つた、世界最初の海底トンネルである。

(これらのトンネル↓関門鉄道トンネルと関門国道トンネル)

〔例16〕 鳥取平野のずつと南に中国山地の山々がかべのように続いています。長い年月の間に、この山々の岩石がくだけてすなとなり、鳥取市を流れる千代川に流れこみ、日本海に運び出されてたまつていきます。

(この山々↓鳥取平野のずつと南にかべのように続いている中国山地の山々)

〔例17〕 本州の西のはしにある下関と九州の北のはしにある門司との間には関門海きようがあります。このため、本州と九州との間を行き来するには、船に乗らなければなりません。

後の文の冒頭の「このため」は「この」というコ系統の指示語をふくんでいるが、「ため」は、「この」というコ系統の指示語。この点は例10と16と違うところである。「このため」の内容は、

「本州の西のはしにある下関と九州の北のはしにある門司との間には関門海きようがあるため」である。すると、「この」に相当する部分は——線の部分である。「本州の西のはしにある下関と九州の北のはしにある門司との間には関門海きようがあるため」という語句をそのまま具体的に反復するかわりに、指示語の「この」を使つて「このため」と反復したものである。したがつて、例17は、

○本州の西のはしにある下関と九州の北のはしにある門司との間には関門海きようがあります。本州の西のはしにある下関と九

州の北のはしにある門司との間には関門海ぎようがあるため
本州と九州との間を行き来するには、船に乗らなければなりま
せんでした。

と意味は等しくなる。

次の例18・19・20・21なども同様の例である。(注) 反復内容
は、それぞれ()内にそれを示した。

〔例18〕 いかだは、しばしば、予定のコースからはずれました。
そのつど、じゆんし船「きそ」に、予定位置まで引きもどして
もらい、また、ひょうりゆうを続けました。

(そのつど↓いかだが予定のコースからはずれるつど)

〔例19〕 しばらく見ていたが、蚕はまゆを作ろうとはしないで、
わらのあいだを歩きまわっていた。そのうちに、ようやく場所
が決まつたらしく、ひとところにじつとして動かなくなつた。
(そのうち↓蚕がまゆを作ろうとはしないで、わらのあいだを歩きまわ
っているうち)

〔例20〕 わたしは、岩の上にはい出して、すみきつた空気を、い
つぱいすいこみました。そのとき、川べりのほうから、急にあ
きら君の声がしてきました。

(そのとき↓わたしが岩の上にはい出してすみきつた空気を、いつぱい
すいこんだとき)

〔例21〕 数えきれないほどのいかつり船があかあかと電とうをつ
け、夜どおし、まつ暗な海をてらします。そのあかりで、いか
をさそいよせて、つり上げるのです。

連文における叙述内容の反復

(そのあかり↓夜どおしまつ暗な海をあかあかとてらしているいかつり
船の電燈のあかり)

右にあげた諸例は、同一語句を具体的反復するかわりに、コ・
ソ・(ア)系の指示語およびコ・ソ・(ア)系の指示語を含む語
で表現したものである。指示語による抽象的な反復と呼ぼう。叙
述内容の反復の第二類型とする。

指示語のいわゆる指示内容をあきらかにすることは、そ
の指示語によって反復されている叙述内容をあきらかにすること
である。指示語によって持ち込まれている叙述内容をあきらかに
することであると云つてもよい。

(注) 指示語による場合、反復内容という言い方よりも、むしろ持ち込
み内容という言い方が適切のようにも思う。

指示語による持ち込み内容、もしくは反復内容をあきらかにし、
それを言語化する場合、先行表現の語句そのままでもなく、語順を
かえたり、表現を一部かえたり一部つけ加えたり、あるいは要約
したりすることが多い。それは、反復されている叙述内容を具体
化し、整理するために当然のことである。むしろ、それが指示語
による反復の特色である。だから、叙述内容の具体化および整理
を必要とする反復のことを、本稿では抽象的な反復と呼ぶことに
した。この点が、先にあげた第一類の場合と違う点でもある。

ところで、指示語による反復内容(持ち込み内容)を先行表現の
中に求め、整え、言語化したものについて考えると、この場合も
反復される前のものと反復したものとの間に、叙述内容の重なり
合いがなされているという見方ができる。

四 接続詞の語頭部分による抽象的な反復

〔例22〕 犬が病気になる、鼻の頭がかわきます。すると、犬は

ふだんより、鼻がきかなくなりまして。

後の文の冒頭は「すると」という接続詞である。「すると」は、指示語を含んだ「そうすると」と等価である。その結果、

○犬が病気になる、鼻の頭がかわきます。

そうすると、犬はふだんより、鼻がきかなくなりまして。

のようになり、先にあげた第二類型による場合と類似する。即ち「そうすると」の「そうする」による反復内容は、前の文の「鼻の頭がかわく」である。〔示すと、

○犬が病気になる、

鼻の頭がかわきます。

鼻の頭がかわくと、犬はふだんより鼻が

きかなくなりまして。

そうすると
すると

となり、□の中の「鼻の頭がかわく」という判断内容が重なり合っていることがわかる。「鼻の頭がかわく」という句を、そのまま具体的に反復するかわりに、「すると」の「する」によつて、抽象的に反復したものである。

〔例23〕 コレットイが、わざとしたのでないことは、ぼくにもわかつていた。だから、ぼくは、このときコレットイをゆるしてあげなければいけなかつた。

後の文の冒頭は「だから」という接続詞である。「だから」を、指示語を含む語句に作りかえて、「そうであつたから」とする。

○コレットイがわざとしたのでないことは、ぼくにもわかつていた。そうであつたから、ぼくは、このとき、コレットイをゆるしてあげなければいけなかつた。

となり、この場合も、先にあげた第二類型による場合と類似する。

「そうであつたから」の「そうであつた」による反復内容は、前の文の「コレットイがわざとしたのでないことがわかつていた」である。

○コレットイがわざとしたのではないことは、ぼくにもわかつていた。〔コレットイがわざとしたのでないことが、ぼくにもわかつていたから、ぼくは、このとき、コレットイをゆるしてあげなければいけなかつた。

となり、□の中の判断内容が重なり合っている。「コレットイがわざとしたのでないことがぼくにわかつていた」という語句をそのまま具体的に反復するかわりに、「だ」によつて抽象的に反復したものである。

一般に、接続詞は、その語頭部分に、先行表現の抽象的な反復機能があり、末尾に、接続助詞と同じく関係を示す機能がある。

(注)このような二つの機能をそなえ持つ語類をここでは接続詞と考える。反復機能を示す語頭部分が顕在する場合と隠在する場合とがある。

そのことは、接続詞を、例えば、「だから」→「そうであつたから」と、コ・ソ(ア)をふくむ語に作りかえるといつそう明確になる。例えば、次のように。反復を示す部分を――線で、関係を

示す部分を……線で示す。

○けれども↓そうであるけれども。

○さて ↓それはそうとして。

○しかし ↓そうだけれども。

○しからば↓そうであるならば。

○しかるに↓そうであるのに。

○したがって↓それだから。

○だけど ↓そうであるけれども。

○ところが↓そうであるのに。

さらに、例をいくつかあげる。——線で反復内容を示した。

〔例24〕 女の子は、ほうほう歩き回りました。けれども、どこへ行つても、水は見つかりませんでした。

(けれども↓そうであつたけれども↓女の子は、ほうほう歩き回つたけれども)

〔例25〕 「帰れ！帰れ！ひつ返せ！フカだぞ！」かんばんの人々は、声を限りにさげんだ。しかし、ふたりの少年には、その声が応えんの声としか受け取れなかつた。

(しかし↓そうだけれども↓帰れ！帰れ！ひつ返せ！フカだぞ！とかんばんの人々が、声を限りにさげんだけれども)

〔例26〕 真治が、目をかがやかせながらそう言つと、両親は、よく考えておこうと答えた。ところが、田植えがすんでも、グローブはなかなか買つてもらえなかつた。

連文における叙述内容の反復

(ところが↓そうであつたのに↓両親は、よく考えておこうと答えたのに)

〔例27〕 今から何万年も前の人々は、火を使うことを知りませんでした。そこで、火山が火をふいたり、かみなりが落ちて木がもえだしたりするのを見て、ただおどろいたり、おそれたり、ふしぎがたりしていました。

(そこで↓そうであつたので↓今から何万年も前の人々は火を使うことを知りませんでしたので)

さて、接続詞の語頭部分による抽象的な反復を叙述内容の反復の第三類型とする。第三類型の特色は次の通りである。

1 接続詞の語頭部分による反復内容は概念ではなく判断内容である。

2 一つの接続詞の中に反復を示す部分と関係を示す部分とが結合している。同一接続詞でも反復を示す部分が具体的に異なる判断内容を反復するかは、個々の連文によつて異なる。

3 接続詞の語頭部分が反復している判断内容を、前の文の表現の中に求めて、整え、言語化することが、即ち、判断内容が重なり合うことである。具体化及び整え、言語化する媒介にコ・ソ系統の指示語を想定することが可能である。

五 三類型の関係

連文における叙述内容の反復に、三つの類型をたてた。第一類型は、同一語句による具体的な反復、第二類型は、コ・ソ・ア系統の指示語による抽象的な反復、第三類型は、接続詞の語頭部分

による抽象的な反復である。

ところで、第一類型は、反復としてもつとも直接的である。概念あるいは判断内容の直接的な反復だからである。その意味で概念あるいは判断内容の反復の基本型である。

第二類型は、コ・ソ・ア系統の指示語の、いわゆる指示内容をあきらかにすることによつて、第一類型に還元される。つまり、その指示語が反復している概念あるいは判断内容を先行表現の中に求めて整え、言語化することが第一類型に還元されることだからである。

また第三類型は、第二類型を媒介として、第一類型に還元される。つまり、接続詞の語頭部分が反復している判断内容を先行の文の表現の中に求めて整え、言語化することが、第一類型に還元されることであり、その整え、言語化する手がかりにコ・ソ系統の指示語を媒介とすることができるからである。三者は、概念あるいは判断内容の反復という点で、右のような関係にある。

六 補 足

これまでの例は、直前の文の語句を反復する場合の例に限つていた。直前の文でなく、さらにそれよりも前にある文の語句を反復する場合がある。例えば、次の例28・29・30のような場合である〔例28〕①にわの向こうには、大きな木のしげつている広い森がつづいていました。②その向こうは海で、いつも大きなふねが行つたり来たりしていました。③森の中に、一わのうぐいすが住んでいました。

三番目の文の冒頭の「森」は、一つとびこえて一番目の文中の……線の「森」を反復したものである。

〔例29〕①よい文章に見せかけようとして、ことばをかざつたり、むずかしい言いまわしをしたりする人があります。②けれども、そんな書き方をすればするほど、真実から遠のいた文章になります。③そうばかりではありません。④そういう文章は、読む人にいやな感じを起こさせるものです。

四番目の文の冒頭の「そういう文章」は、「よい文章に見せかけようとして、ことばをかざつたりむずかしい言いまわしをした文章」と等価である。この例の場合も反復しているのは直前の文ではなく、二つとびこえて、一番目の文中の語句である。

〔例30〕①その話を聞いて、姉の清子が、「そんなら、わたしがおとうさんの代わりに出ましよう。」と言いだした。②清子は中学の二年生である。③すると、小学五年生の真治も、元気な声で言った。

三番目の文の冒頭の接続詞「すると」は「姉の清子が『そんなら、わたしがおとうさんの代わりに出ましよう。』と言いだすと」と等価である。この例の場合も反復しているのは、直前ではなく、一つとびこえて一番目の文中の語句である。

これらの場合、例えば、例28は第一類型に、例29は第二類型に、例30は第三類型として考える。

〔付記〕本稿は、昭和四十年六月五日の立命館大学日本文学会第十二回大会での研究発表「文の連接」の一部である。なお、このことについては、同年八月二十一日、立命館大学第一回国語教育セミナーでも「連文の問題」としてふれた。